

# 家出願望をもった女子中学生の面接

## —風景構成法による新たな出発—

### Counseling a Junior High School Girl with Runaway Wish

### —Starting a New Life using the Landscape Montage Technique—

桜井 育子

#### I. はじめに

父と母と袂を分かちたい、その束縛から離れたいという親への反発、反抗はこれまでの自分を否定し、脱皮していききたいという成長への欠くことのできない儀式的様なものである。中学生の一時期、誰もが親から自立したい、家を出たいと思った記憶を有しているだろう。「学校に皆と同じように行けるようになりたい」という本人の希望によって面接を開始して1年後、少女A子にはこれまでの自分から脱皮したいという、内なるうごめきが生じ始めた。思春期にはしばしば、誕生からこれまでの発達課程でのやり残しをとり戻そうとする、自分探しの貴重な、そして危険な旅が始まる。

本稿では中学生女子の家出願望から導入した風景構成法を手がかりにして、家出のテーマを取り上げてみたい。

なお、本症例は公的機関におけるすでに終結した研修事例である。

#### II. 事例の概要

<クライアント> A子 中学2年生女子

<主訴> 登校拒否——適応障害による（上林 37、町沢 512参照）

<家族> 父 40才代後半、自営業経営者  
母 40才代前半、家業手伝い  
兄 高校2年生

<生育歴および現症歴>

母親面接担当者からの報告によると、A子は幼稚園の頃からずっと友だちが出来ない子だった。小学1年の1学期間は毎日授業中に失禁して学校の椅子に使用している布団がびしょり濡れていた。小学3年頃から登校時間前後に胃が痛み、次第に登校中も胃痛が続くようになった。以後、小児科、内科病院めぐりが始まる。中学校入学後1ヵ月は登校、その後は断続的に欠席する。父親が2階のA子の部屋からひきずり降ろしたり、車に乗せて無理に登校させるため、逃げまわっていた。中学1年10月頃から約1ヵ月間は登校を装って家を出るが一日中物置に隠れていた。このことがあってから、父親は無理にA子を登校させるのをあきらめた。1月から完全不登校、昼夜逆転になる。A子は昼間は家族を避けて部屋に籠り、一日中ベッドの中でぼんやりしている。家族と一緒に食事をしていないので、部屋に食事を運んでいるが、食べていないことが多い。母親は母親の持病のリウマチがA子の体にも影響するのではないかと、A子が食事を拒否することは最も不安なことだと語る。

#### III. 治療の経過

<インタビュー>

中学2年4月に受診した内科医の紹介で、5月に母親とA子が来所する。A子の面接担当者Sと母親担当者Yが待合室に行くと、母子ともに緊張した表情で時間を待っていた。A子は母親と同席の時は強く口を閉ざしている。母親はYに前述の

現症歴などを話し、A子は強情で自己主張が強く、母親の言う通りにはしないなど不満を訴え、明日からすぐに学校に行けるようにしてほしいと要求する。Sと別室に移動したA子は、体中をこわばらせ、外界からの侵入を全力で拒否しているようである。両眼を見開きまばたきもしないでSに食い入るような視線を投げかける。Sはその鋭い視線を目をいっぱい開いて受け止めた。少しでも自分と異質なものが触れると拒絶、崩壊しそうな堅さ、まるで無機質なガラス体である。それでもバウムテストを実施しているうちに、小学2年頃から胃痛、頭痛で登校できないこと、「普通に学校に行けるようになりたくて」自分の意志で来所したことをSに伝えた。以後、A子は一人で来談する。高校入学前の4月まで約2年間、週1回、50分の面接を68回継続した。担当のSは40才代、Yは50才代ともに女性である。なお、Yは小人数の学習グループの担当者でもある。

#### <治療経過>

68回の面接は時間的経過では5期に、内容的には大きく3区分できる。一人の世界のA子、I期（#1～#16）、II期（#17～#36）と、仲間を求めて動き始めるIII期（#37～#48）、IV期（#49～#64）と、新しい歩みを始めるV期（#65～#68）に区分してみる。I期は面接導入期で、A子は自分の世界にひきこもったままの時期である。II期はY担当の学習グループに参加しはじめる、他者と交わる準備期ともいえる。III期は新しい学校へ転校する、友だち探しの活動期であり、A子の外界へのかかわりが試行錯誤に始まる時期である。IV期は実際にも旅に出かける、自分探しの活動期といえる。高校入学前に面接のまとめをするV期は、自分をたしかめる作業を行う確認期でもある。本稿でとりあげる風景構成法は治療経過後半のIII期(3)、IV期(5)、V期(1)の計9作品である。

面接時には他にバウムテスト、箱庭、ゲーム、木の実拾い、工作、タイル、自由画などを行った。

#### IV. 風景構成法による新たな出発

##### <風景構成法の導入>

A子はII期（#17～#36）では学習グループに参加して、黙して会話はしないが、2、3人の仲間を得た。さらに待合室で3年の女子中学生2人と挨拶を交わすようになった。この3年生と同じ中学校に2年の3月に転校したが、3年生が卒業すると同世代の友人とは馴染むのがむずかしく、学校では再び寡黙になっていく。A子は登下校途中の町を一人で歩き、道を迷いながら歩くことをくり返す。しばらくすると、A子は「旅に出たい」「どこか遠くへ行きたい」とSにたびたび言うようになった。《旅に?》《うーん、どうやって旅に出ようか》「……」《箱庭で旅をする?絵で旅をする?それとも…》「絵がいい」《絵で旅をするには自由に描くのもいいし、Sが描くものを順番に言う方法もあるし、…他には》Sが他の方法を考えているうちに、A子は言われたものを描く方が楽だからと後者を希望する。

こうした経緯で68回の継続面接の後半、42回（中学3年5月）から自由画ではなく、中井久夫創案（1969）の風景構成法による旅が始まった。作品に「題して…」とあるのはA子のつけたタイトル、《……》はSのつけたタイトルである。A子の発言には「 」で、Sの発言は《 》で表記する。《「……」》はA子が発言するかもしれないとSが予想したものである。作品の解説に入る前に、簡単に風景構成法の手順を紹介しておく。

##### <風景構成法>

(The Landscape Montage Technique)

絵画療法の一技法で、中井久夫によって1969年に創案され、1970年に報告された（山中 11、皆

藤 3参照)。道具はA4版の画用紙、黒のサインペン、24色程度のクレヨンを用意する。具体的には以下の方法で実施する。「(1)画用紙を提出し、枠どりをしてから、『今から私がいうものを、一つ一つ唱えるそばからこの枠の中に描き込んで、全体として一つの風景になるようにして下さい』と告げ、サインペンを手にわたす。

(2)①川、②山、③田、④道(以上大景群)⑤家、⑥木、⑦人(以上中景群)⑧花、⑨動物、⑩石(以上小景群)⑪足りないと思うもの。

(3)色彩、完成させる。

(4)必要な質問(季節、時刻、天候、川の流れる方向、人と家、田などの関係、人は何をしているかなど)、連想、支持など。」(中井 1984a: 48)

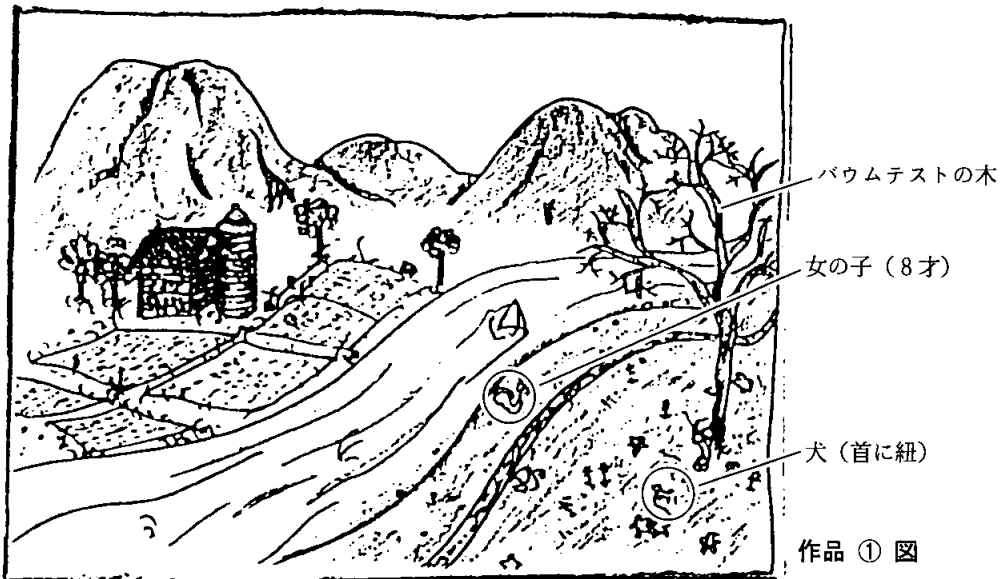
中井は第一回芸術療法研究会での河合隼雄の箱庭療法の講演をきっかけに精神分裂病者への箱庭療法導入の予備テストとして風景構成法を開発した(中井 1984b 268参照)。

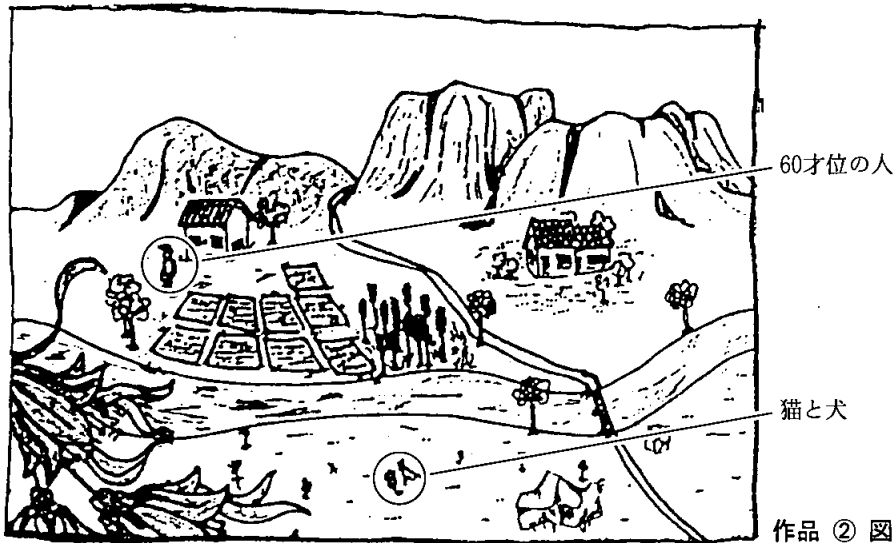
従って箱庭療法との比較は枠づけによる保護、砂による退行等、治療上重要な示唆を与える(中井 1985c 226、河合 252参照)。

<風景構成法による風景画作品を読む>

作品①(×年5月28日)#42「題して旅のはじまり」

少女は希望どおり旅をすることになった。橋のかからない川の対岸には堅固な、出入口のない閉塞した家がある。A子は自宅の屋根と同色だと力をこめて色塗りをする。少女はこの家の中に小学3年から中学2年まで引き籠っていた。少女を堅固に守ってしてくれた緑色の瓦屋根の家である。川は右斜め上から用紙の左下へと次第に太くなり、水量の豊かなあふれんばかりの急流である。川のこちら岸、帽子を被った女の子(8才)が座っている背後には、A子が自分の木として描いてきたバウムテストの木がある。この木はI期、II期を通して描き続けたA子の勇気、投げ所の木。<sup>(註1)</sup>この勇気の木に見送られて少女は旅に出る。対岸の茶色に枯れた大地の草、田と対照的な緑に萌える春の豊かな岸辺で、少女は家に別れを告げている。少女の旅立ちへの思いの深さ、激しさを象徴しているような川の岸辺で、旅立ちの決意を確かめているように見える。少女は犬を連れて旅立つことにした。犬は少女のお供、道案内、そして安心の象徴でもある。図①は《別れを告げる少女》と題をつけた。





作品②（×年6月4日）#43「題して旅のつづき」

少女はどういう道筋で旅を続けたのだろうか。図①の川に沿った小径を犬と歩き続けて図②の用紙の右下の道へ出たのであろうか。川は中央位より下部に右から左へと図①より少しく穏やかに流れる。水位が深くなったのか水しぶきも上げず、青く濃く採色されている。右下から中央上方へ細く続く道は川にかかる橋を渡り山間に延びている。山は図①と似た容姿でゴツゴツした山肌をみせているが、図①の緑色から図②では茶色に変わり、その質感と一致する。山裾の大地は黄土色の上に部分的に緑が芽生えて豊かさを感じられる。しかし田は、図①の枯れた茶色ではないが、茶系に色塗りされている。少女は猫に変身したのか、連れだって旅に出た犬と黄緑色のこちら岸から対岸を眺めている。山裾は縦に走る道に分割され、左側に水色のトタン屋根、右側に赤瓦の屋根で、窓のある均整のとれた家が描かれた。図①のバウムテストのA子の木は姿を消し、花が大きく強調して描かれるようになる。猫と犬は対岸の60才位の性別不詳の人物が左へ歩く姿を追っている。何をしているのかとA子にたずねると、「これからどこ

かへ行くみたい」と説明する。

43回の面接を終えて学習グループに参加したA子は、「先生肩凝ってる？」とYの肩に手をかけて揉む仕草をしたという。かつて筆者はA子を《ガラスの世界に住む少女》<sup>(註2)</sup>と名づけたことがある。その無機質な世界の住人であったA子が柔らかい人の肌に触れたというYからの報告に、深い感動を覚えた。図②は《はじめに会った人》と題をつけた。

作品③（×年7月9日）#47「記入忘れ」

図③は図②から1ヵ月後の作品である。山間の小径を進み、さらに旅を続けると戸数の多い村に出た。大きな花は用紙の右上角に移る。図②では川の対岸にあった黄土色の田が図③では手前に大きく広がる。山はなおも険しくそそり立ち、山肌は茶色に採色されている。大地には茶系の色しかなく、田では60才位の性別不詳の2人が、田植えをしているのか、かがんだ姿勢で描いてある。左の田にしっかりと立つ女の子（8才）は、手伝うように言われたが、立って働く人を見ているだけとA子は言う。右上の山間から左下に流れる川に

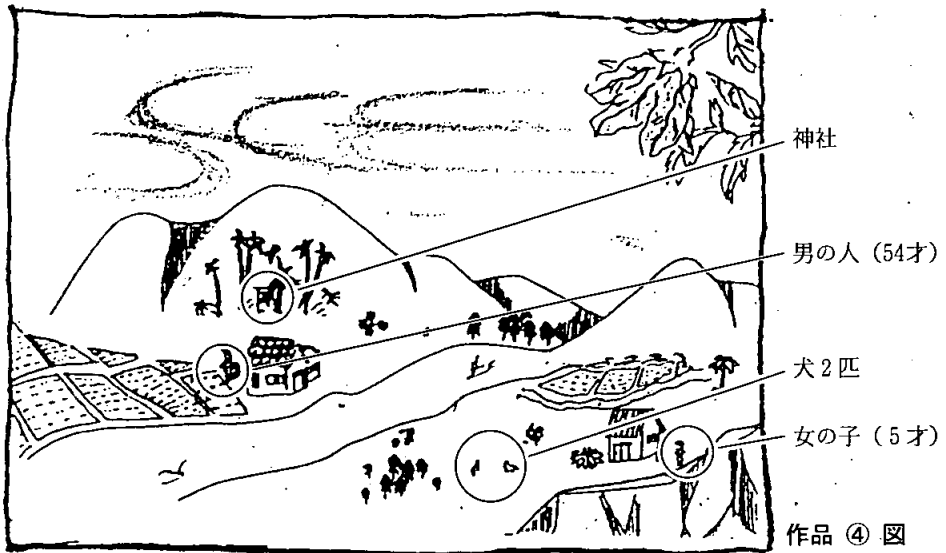


交錯して、橋を中心に左中位から右下方向に細い長い道が続く。川の右側、こちら岸の家群は青色のトタン屋根で、一軒だけに窓がある。その右端にある大きな岩の付近には村中の犬4匹、猫2匹が集まって「のんびり」仲間と過ごしている。対岸の左群の家々は図①と同型の出入口のない家を含んだ緑色と青色のトタン屋根になっている。さらに右の山裾には遠くに小さく家と田があって、合せて3集落になる。A子はこの風景の中で一番気に入っているところは中央のつり橋だと言う。この橋を描く時には筆先に力を注ぎ、Sには《希望》をこめているかのような、A子の思いが伝わる。橋は旅する少女に自由を保障する。左岸にも右岸にも行くことができる。少女はこの橋を渡って対岸に行くこともできる。少女は対岸からこちら岸へ橋を渡ったかもしれない。

ところで、転校して3ヵ月が過ぎたA子の実生活はそれ程スムーズに展開しなかった。A子は初回面接の頃のように体を硬直させ、息を詰めたようなうつうつとした表情で面接室に入る。学校では一人で過ごしているA子の姿が報告された。同年代の集団に交わる時の「胃がシクシクす

る」<sup>(注3)</sup>と訴えるA子の日常の緊張が伝わるかのように、図③では右上角からオレンジ色の花びらが落下する。しかし、作品の中の少女はここでふんばっている。人物はしなやかさを欠いた線状姿だが田の中で足を開いてふんばり、かつてのように閉ざされた一人の世界、堅固な家に退却しない。実生活でのA子もまた、一人で過ごさなければならぬきつい時期をよく耐えていた。

採色をしながら「この頃、友だちができるよこの話をしているんです」と、A子は自宅近くのレコード屋のおばさんの話をする。「S、Yの話をしたら、そんな先生に会いたっておばさんが言った。」レコード屋のおばさんと昨日は2時間位話した。「知り合いというか、知人というか、…でも顔を知ってるだけでなく話をして本当にわかり合えるから、友だちなんです…。」「歳はお母さんより上なんだけど」と、A子は自分なりに友だちは年令に関係なく心が通じる人なんだと言語化する。この日は友だちができた話を夢中で書いて「題して…」を記入するのを忘れた。A子は《題して友だちができた》とするつもりだったのだろうか。



この日の学習グループでは、A子は「分数がわからない」とはじめて勉強の内容に関する発言をしたと報告があった。これまでのA子には知らない、できないという表現はなく、体を堅くして頷くのがぎこちなかった。A子ができないことを人に言葉で伝えたことは感無量である。田でふんばる8才の女の子の姿に声援を送りたい。作品③は《ふんばる少女》と題をつけた。

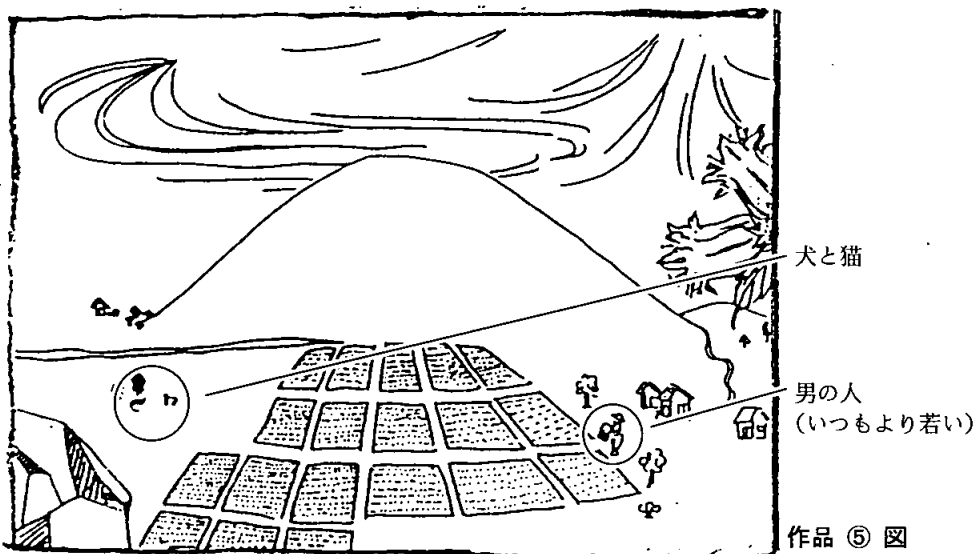
作品④（×年10月1日）#54「題して西表のペンションより」

図③でのふんばりは少女を少し強くした。A子は学校の夏合宿には欠席したが、西表島への団体旅行、母親の知人が主催する小学生の学習グループの合宿には参加した。例年はさそわれても断わり続けていた旅行だった。雪の降る地方へ旅行するのを好み、「私、暖い地方はいや」と、拒絶にも似た語調で話していたのに、南——それもずっとずっと南の島へ出かけた。図④は図③から3ヵ月後の作品である。

旅先の西表島を描いたのだろうか。広い広い空、それを水色の曲線で表現している。島の山はなだ

らかな姿になり、緑が淡く採色された。川は右の山裾から左下角に流れ、美しい南国の水を、緑、黄緑、青、紫で色づけしている。川の両岸に田がある。大地も、田も初めて茶系色から緑色に変わった。川のむこう岸には、山の中腹にA子の最も気に入った場所というヤエヤマヤシと神社がある。その裾には均整のとれた窓、出入口のある赤い琉球瓦の家と、田で働こうとする男の人（54才）が描いてある。川のこちら岸には遠く山裾に豊かな田があって、その下辺を通る道は川の手前で行き止まりになっている。この道の右下には赤瓦の出入口と窓を備えた家があり、すぐ近くを赤いワンピースを着た女の子（5才）が歩いている。最後に画用紙の右下角には大きな岩を描いた。「これだと崖みたい」、「先に描いた女の子が落ちちゃう」とA子は言う。中央寄りに犬が2匹むかい合っている。川には橋はかかっている。少女にとって対岸は彼岸、理想の地なのだろうか、渡ることができない。図④は《理想郷をみつけた少女》と題をつけた。

西表島：A子は長い間堅く閉じた殻の中に籠り



ながら自分のあこがれの地、理想の地を探していた。自室に籠り、布団にもぐり込んで空想の花、木を描き、空想の地に一人で住んでいた。激しく拒否していた南の国をたづねて、A子はその島の空、海、貝の神秘的な美しさに小踊りしたのではないだろうか。A子の持参した西表島の写真には島の同じ景色が何枚も写っていた。波ばかりだったり、水中の貝に焦点を当てたりとその神秘的な美しさをなんとか写し撮りたいというA子の思いがSに伝わる。西表島の風景はA子の空想の世界にどこか通ずるものがあったのだろうか。

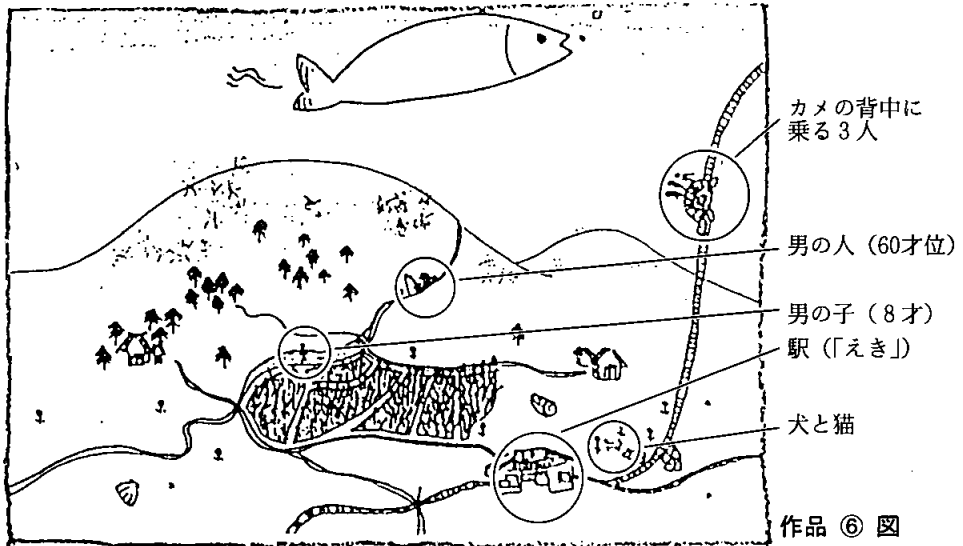
作品⑤(×年10月8日) #55「題してはたらきものまち」

山は中央に大きく描かれた。夕陽に映えたかのように赤く、山肌はなだらかで美しい。空にはサインペンで図④の水色の曲線よりもはっきりと動きのある線が黒く描かれた。大地は黄緑で淡く採色され、豊かな南国の地を思わせる。緑色の田は整然と19に区切られ、肉づきのよい、男の人(いつもより若い人)が働いている。家には出入口と窓があり、均整はとれているが、いずれもこれま

でより小さく描かれている。犬と猫は田の左、川のこちら岸でむかい合う。図⑤は図④の右の山裾の緑の田を中央に配置した拡大図のようにみえる。両者とも行き止まりの川と道が印象的な風景図である。豊かで平和な風景だけれど、空には何かうごめいている。少女はこの地には道が途切れて足を踏み入れることができなかったかも知れない。理想の地は働き者しか住めないのだろうか。さんさんと降り注ぐ太陽か、風か、サインペンの黒ラインの上に赤と青、紫の採色がされ一層あこがれの地を晴れやかにしている。図⑤は《行き止まりの地》と題をつけた。

作品⑥(×年10月15日) #56「題してみんなで家出をしよう！」

A子は学校へ行かない仲間が駅周辺に集まっているM市へ立寄って、その市で一人暮らしをしたい、そうでなければ遠く北の地に移り住みたいと家族に訴え始めた。作品①から5ヵ月後、Sには「家出をしたい」とはっきり口に出して言うようになっていた。家を出たい、ずっとずっと遠くへ——図④⑤で理想郷への旅をした少女は何かを求



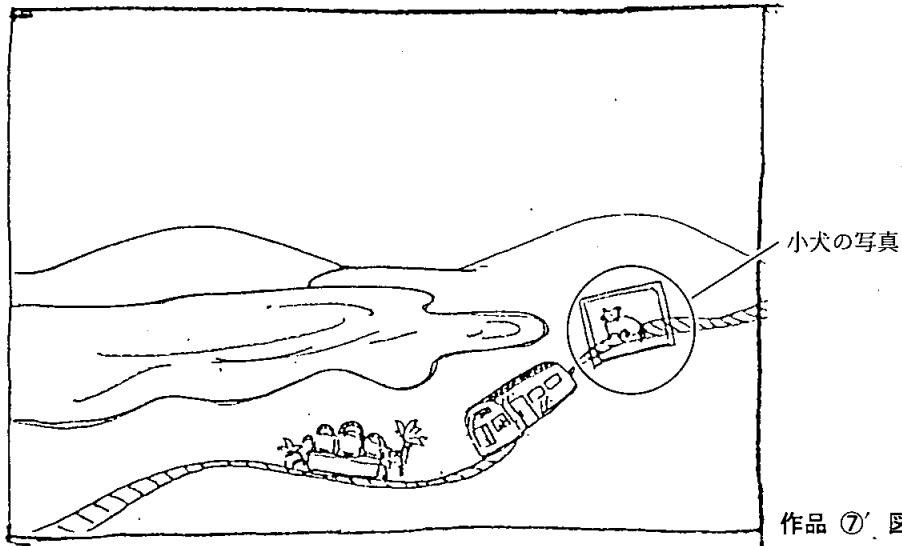
め、空に描いたごとくに自らの中にうごめくエネルギーにつき動かされる。作品⑥の旅は一人では決行できなかったのか、Y、Sを仲間にして出発する。

これまでになくなだらかな山が画面左から中央を占めて、右に遠景の山が描かれた。川は左の山の右八合目あたりから左へ流れる。この川は中央部が太くなり、その側には田が豊かに描かれる。田は画面の中央に良く耕され、初めて稲の成長している姿になる。川上では60才位の男の人が魚つきをしている。太くなった川には8才の、はじめ女の子にしようとした男の子が水あそびをしている。田の畦道は図⑤のようにきっちりとした碁盤目に区画されておらず、カーブしたり、斜めだったり、ごく自然に風景に溶け込んでいる。山の裾野左側には社らしき形をした茶色の家が2軒、右側には赤瓦の民家が2軒、出入口を備えて描かれている。この都会風の家の前から橋を渡ると細道が社の上の森に続き、社の前からは画面の中央下に向う一本道と、田に沿って右に続く道がゆるやかに延びている。こんな安らかな風景はこれまでの旅では見つからなかった。山には杉の木がある。

A子は採色のとき、「私、杉に色をつけるのはじめてです」と言う。山は淡い緑に黄色や赤色をかけて紅葉の盛りとなる。川は水色を濃くして細いが目立つ、しっかりした流れをしている。すっかり採色も終り題を決めているうちに、A子は空に魚を付加したいと言い出した。巨大魚が右むきに水泡を吐き、尾をゆらす。空が海になり、紅葉の山が水中の竜宮城と化す。海底に沈んだ美しい風景を前に、大変なところに旅をしてしまった、どうやって地上に戻るのだろうかと心配していると、A子は海上に通じる線路を描き加えた。さらに支線を加え、田の左下の道と交わる場所に赤い屋根の駅舎を描き、「えき」と看板を書いた。駅舎は左右に窓があって、出入口は広く、どの方向にも通ずる。さらに、右山上方の線路には海底へと下るカメの列車を加える。カメの背にはA子、Y、Sの3人が乗る。最後により海らしくするために、2枚貝を左に、駅の上方に巻き貝を付加する。今回は大きな花は姿を消し、巨大魚が描かれた。図⑥は《竜宮城》と題をつけた。

A子は「題して…」と書いた先に続けるタイトルを決めかねている。「みんなで家出をしよう！」





作品⑦' 図

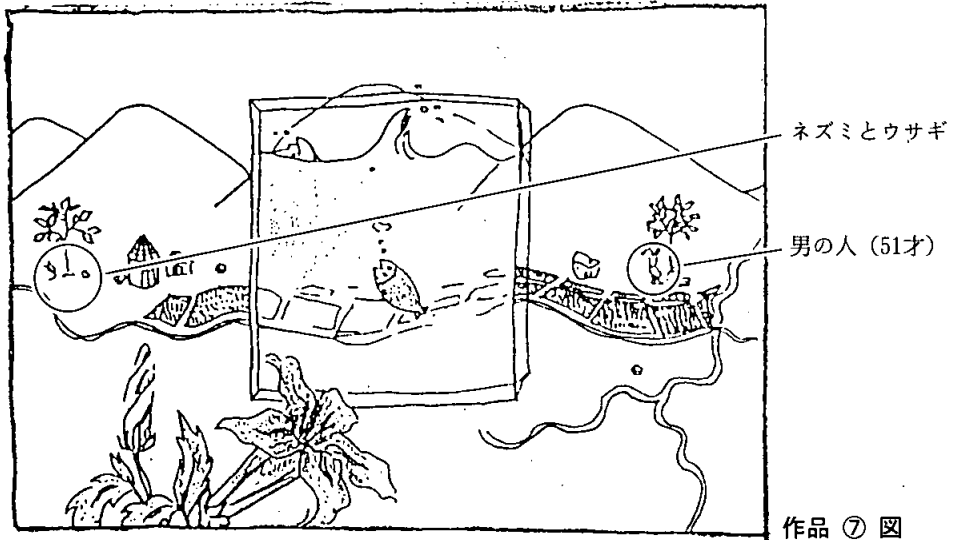
「わるだくみ」「Y先生をさそってピクニック」「海の底に家出をしよう」「海底駅」……次々出てくるので、全部書くことにした。遠すぎるところに行ってしまうとも思ったが、線路は海上に続いているし、担当者2人が一緒だし、なんとかかなるかなと、絵画の中に描かれた筆者もついににかける気分になる。どこか危険な秘密の旅が始まり、Sは風景構成法では、この旅の秘密を共有することになった。A子はほおを紅潮させ、わくわくとして「わるだくみ」を楽しんでいる。ここは遠い、M市より北海道よりも遠い。

A子は図⑥の作成後、いたずらっぽく笑をこぼして帰途に着いた。この2日後、実際に家出をする。家人に書き置を残し、早朝の始発電車に乗ってC鉄道をめざす。海を求めて家を出たが、家出は一日で終わった。A子にとっては初めての一人だけの遠出だった。次週に図⑦を描いた後で「もう一枚描きたい絵があるんです」と、⑦'「題して銚子電鉄701」を描いた。この1週間後には当日の写真ができたと持参して、1枚1枚を丁寧に説明した。⑦'の中央の建物はA子の写真にあったC鉄道近くの駅舎によく似ている。線路上にある

電車の後の枠つきの犬の絵も写真にあった。一人で駅に降りたA子に寄って来た白い小犬の写真である。A子は目をクリクリさせて小犬との不思議な出会いを語り、写真を大事にハンカチに包んだ。

作品⑦ (×年10月22日) #57「題して海底の海底」

山は遠く高く4山が連なり、やわらかな山肌に見える。川は中央を左右に横断している。細い川に沿って黄緑色の田がむこう岸に広がっている。道は右の山間から下り、川を渡りその先で2手に分かれる。用紙の縁まで下る道と、中央の水槽の方向にむかって途中で行止まる道がある。木は川の向こう岸、画面の左右に1本ずつある。左の木の下にはネズミとウサギが、右の木の下には果物を採っている男の人(51才)がいる。左の木の側には出入口を備えたサイロ風建物と民家とがある。画用紙中央には白地が残されたままに空けてある。《何か描き足すところはある?》とたずねると、「あります」「はじめから空けておいたんです」と、すぐに中央部を描き始めた。透明なガラス製に見える中央の水槽には、嵐の前ぶれのように波が高く立っている。この波は実にリアルで、筆先をじっ

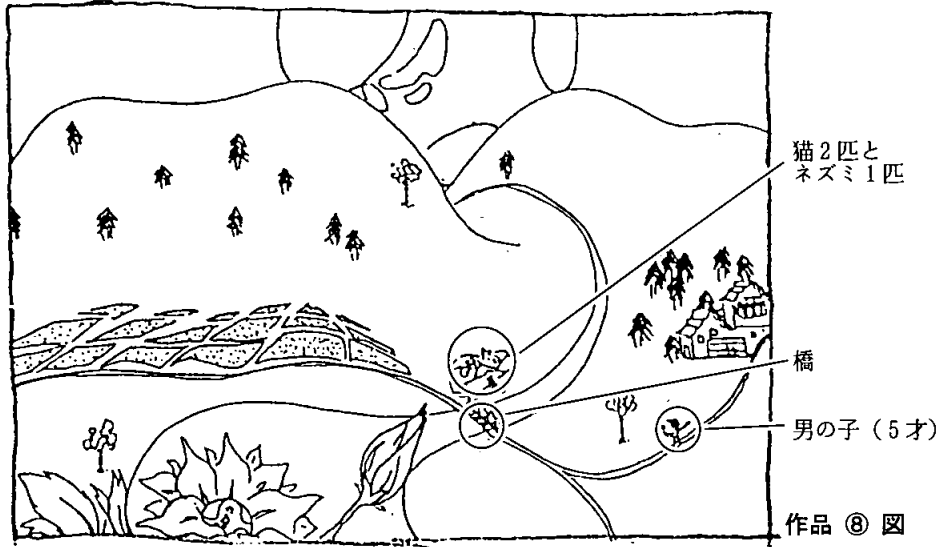


と見ている時には、Sに恐怖が生じた程である。この水槽には水を出す穴はない。中の水はたゆたゆとあふれんばかりだ。「大雨が降ったら大変なことになる」《大変なことになる?》A子は黙って頷いた。そして画面一杯に雨を降らした。気に入っているのは水槽の中の魚だとA子は言う。しかしこれ以上雨が降ったら、排水口のない水槽はA子の大切な魚を守ることができないではないか。A子の身の内に起きている溢れんばかりの激しい動きが伝わってくる。——私が生きていられるところは、このガラス箱の中だけなんです。波は高くうねり、もしこれ以上雨が降ると水が溢れ出して大変なことになるのです。長い間住み慣れたこの水槽から放り出されてしまうのです。——この小さな魚は、今まさに外界に流れ出してしまう不安を語る。その不安の一方で、もう準備されていて勇気さえあれば大丈夫かもしれない予感がこの絵から伝わる。「大変なことになる……」もしかして水槽から溢れ出たらという不安がある。しかし大丈夫、水槽の外には手入れのいき届いた安らぎの風景が出現している。少女の行き着いた「海底の海底」は地の底という不気味なタイトルであ

りながら、水槽の外には魚を窒息させる閉じられた空間はない。この小さな魚がガラスの箱から飛び出す準備は整っているのかもしれない。だが、あせっては危険!高波のうねりに、Sはしばらく旅の中止を試みようとして心に決めていた。図⑦は《危険な旅》と題をつけた。

作品⑧ (×年11月26日) #61「宇宙からみた地球」

図⑦の1ヵ月後、時間半ばになって、A子は再び「旅を続けたい」と、残りの時間に急いで図⑧を描いた。描きたいテーマは決っていたのか筆はどんどん進んだけれど、採色は時間不足でできなかった。山はA子特有の頂上がへこんだ馬の背型をしている。雄大なそして包みこむ様な、やさしさが漂うやわらかい山肌をしている。川は中央の山間から時計回りに曲線を描きながら用紙の下縁左寄りに下り、橋を渡ったところで急に川幅を広げている。橋は図③でA子が気に入っていた中央にかかるつり橋と同じ形をしている。右には5才位の男の子がバットを肩にかついで、ボールを掌の上で投げつつ歩いている。「これから遊びに行くところ」で、男の子は川の向こう岸、田の広



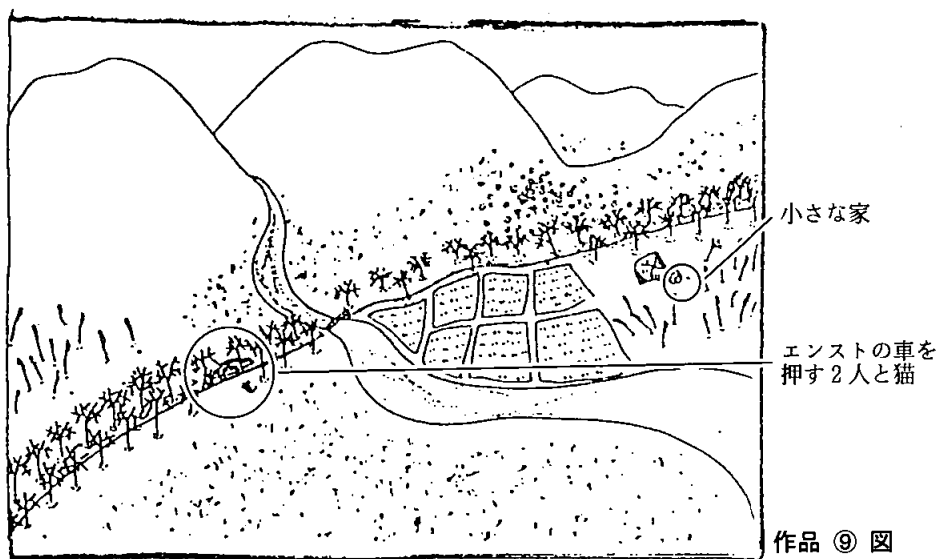
がる左の道へとこのつり橋を元気よく渡って行くかもしれない。橋の左側には猫が2匹と1匹のネズミが大きな岩の上に坐っているように見える。川巾の広い下縁には大きく花が咲き、その花心には日本地図が映っている。「花の真中からはじけた地球が空に浮んでいる」だからここは地球でなくて、「宇宙みたい」とA子は言う。つぼみの中からは「火星が飛び出るかもしれない」、そうすると「やっぱりここは宇宙」だ。少年の歩いて来た背の方向には一風変わった瓦の二階建ての家がある。窓、出入口があって、構えがどっしりしている。宇宙の立派な家には「神さまに近い人」「神さまみたいな人」が住んでいるとA子は言う。作品⑧は《はじきとばされた地球》と題をつけた。作品⑦、作品⑧と非日常の世界への旅には犬が登場していない。

#### 作品⑨ (×年3月17日) #67「車をみるねこ」

図⑧から4ヵ月後、最後のまとめの回の作品が図⑨である。《この絵の中にAちゃんがいるとしたらどこに?》とたずねると、「うーん、猫かな」と、すぐに返事が戻った。車がエンストして2人

の人が後を押している。左下からゆるやかに右上へと続く並木道を、橋をこえてこの車は人に押されてなんとか登って行く。それを猫が眺めている。猫はこの車の分身かもしれない。坂道を押されて登る自分の姿を確認しているかのような猫がいる。この右斜め上に登る道の両側に、A子はこれまでの色々の出来事を筆先に確認するかのように並木を1本ずつ描いていく。大事な道、外へ開かれた道である。山は画面の上部に高く、やわらかな山肌でゆったり描かれている。採色のとき、はじめは黄土色だった山に桃色を散らばせて、山全体に桜の花が咲いたかのように春の景色へと変わる。桃色の中に赤、紫、黄、黄緑の色も入り混る。旅の終わりには旅立ちの時の犬に代り、車の後を押す2人が登場している。車は故障しがちかもしれないが、大きな岩に守られた小さな家へ向かっている。窓がある均整のとれた小さな、小さな家である。図⑨は《戻ってきた少女》と題をつけた。

図⑨では大きな花や巨大魚は姿を消している。図②で画用紙の左下角下に大きな花が描かれたとき、Sは花におけるA子のテーマが出現しているように受け取った。<sup>(註4)</sup> 図①のパウムテストの木に代っ



作品⑨ 図

て、大きな花が旅するA子の拠り所としてこれからの風景面に登場してくるだろうと。そしてA子の一つの課題が終る時、大きな花は描かれなくなるだろうと仮説を立てていた。作品⑨では風景が日常的な距離図式で描かれるので、SはA子との面接は終りに近づいたと予想した。車から飛びおりた(?)分身の猫は車の後を押している2人に「もういいよ押さなくても」と、別れを告げているかのようにきりりとした後姿をみせている。「エンストの車のままでやっていくから」と、2人に言っているかのようなのである。現実生活でのA子は無理をして会話が続かなくなったり、格好をつけて口を閉ざす場面もあるけれど、時には友人と出かけたり、ゲームを楽しんだりできるようになっていた。

Sが《これから面接はどうする?》と、たずねると、A子は「高校が始まるまでもう1回来ます」と返事をした。図⑦の水槽の中にいた小さな魚は外界にとび出す時を得たのかもしれない。A子はすでに返事を用意していたかのようなだった。2年間の面接の終りの時がやってきた。

## V. まとめ

本稿では1つ1つの作品をA子と旅する仮定で丁寧に読んでいくことに主力を置いた。ここでは作品①～⑨を通してA子はどう旅を進めたのか、A子の何が変化して行ったのか、全体の流れをふりかえり、まとめとしたい。

旅に出たい、それは作品①で別れを告げている左岸の堅固な閉塞した家からの脱出である。旅の終わりにA子が帰ろうと目指した作品⑨の家は小さな、小さな家であった。旅を続けるうちに、作品⑨の右端にある神の住居を除くと、人里の家は次第に小さくなる。風景面に登場する家の変容は自分探しのA子の姿にもみえてくる。脱出したいと抵抗した堅固な家は現実の我家であると同時に、A子自身でもある。理想の家を探しながら旅を続けて、A子は等身大の家を獲得したのかもしれない。それにしても作品⑨の小さい家であることは縮小の図では発見できないかもしれない。川の右岸、田の右に大きな岩があってその側に小石のように描かれているのが、宇宙から無事に日本に帰った、現実空間に戻ったA子のイメージの家である。出発の時の家に比べると小さくなったけれど、窓

がある均整のとれた家になっていた。堅固で立派な家ではあったが息を止められるかのような閉塞した家から、呼吸のできる小さな家への転換である。背のびをしてあえいでいる自分から、ありのままの不完全な自分を受け入れるという転換ともいえる。

一年後のフォローアップ面接では風景構成法による旅について、A子は「宇宙の旅のところが怖かった」とだけ感想を語った。作品⑧で少女が花心からはじき飛ばしたのは何だったのだろうか。「家を出たい」「親がうるさい」という中学生の訴えは、家出という直接の言い方を避けて、旅に出たい、アパートを借りて自立したい、病院に入院したいという表現のこともある。こうした家出願望は家族や親への反抗と受け取られがちだけれど、旅するA子のプロセスを見ていくと、幼小期の発達のゆがみを放置したままの自分から脱出を試みたい、という訴えでもある。発達を阻害された時点で旅をしながら立戻り、そこから幾たびかの危機を乗り越えていくプロセスとも言える。《「5才の時のままに放置されている私を、このままにしておかないで！」》と訴える家出である。A子は小学2年頃から登校時の不調があったと話したが、筆者は母親から報告のあった幼稚園児、5才頃からA子には他者関係のむずかしさがあったのではないかと考えている。Yによると、母親からは祖母がA子を側に置いて厳しく躰をしたという他には、5才以前のA子の話が出てこない。作品の風景画には8才、5才の女の子、男の子が登場して旅が続いている。風景画にはA子の再生のプロセスが描かれているとも読むことができるのではないだろうか。

A子は小学2年から始まった胃痛、頭痛による不登校、中学生になってからのひきこもり、昼夜逆転の生活から少しずつ人との関わりを拡げていった。学習グループで小学3年からの勉強をやり直

し——これは担当者Yとの出会いなくしては不可能なことであったが——定時制高校に進学する。異年令集団の定時制高校では高年令の人々が同級生となった。教師の受け入れが整っていたことも効を奏して、かつての緘黙の少女はゆっくりと現実の自分の状態を受け入れ、人との交わりを始めようとしている。

## VI. おわりに

筆者は風景画をA子の発達のプロセスに重ねて読むことを試みた。描画を読むということを石川は次のように述べている。「読む、読まれるの関係が治療関係だから、この治療関係を媒介するものとして絵を使う。その際正常な絵は読みがまいで、1対1に対応する読みがないということは、解釈したりされたりするうえできわめて都合いいことである。むしろ絵の読みは治療者と被治療者の間でつくり出され、それが治療となる。」(石川 1986: 11)

はたして筆者の風景画の読みはいかなる治療となったのであろうか。A子のつけた作品の題に対してSがつけたタイトルは、Sがどう作品を読んだかという集約的表現である。

A子は風景画を家出願望を達成するための旅として描いていたので、本稿では特に家のアイテムを取りあげてみた。A子の風景画の中には川の流れ、山の容姿、大きな花、動物、石(岩)など他に注目したいアイテムがある。とりわけ日常感覚からすると大きすぎると思われる、非現実的時空間を演出する図②～図⑧の巨大な花、魚の存在は興味深い。又、図⑥では描かれた空が海中へと空間の逆転を起こし、図⑧では花心から地球がとび出て、逆にその花心に地球が映る宇宙空間が描かれた。これらの心的エネルギーの意味するところや、他のアイテムに関する論は後日に譲ることにしたい。

## 作品図表

|                      |      |                     |             |                              |              |              |                  |              |
|----------------------|------|---------------------|-------------|------------------------------|--------------|--------------|------------------|--------------|
| 1<br>一人のA子<br>の世界    | I期   | 面接導入期<br>W年5月8日(初回) | No.1～No.16  | 自分の世界にひきこもったままのA子            |              |              |                  |              |
|                      | II期  | 他者と交わる準備期           | No.17～No.36 | Y担当の学習グループに参加し始めるA子          |              |              |                  |              |
| 2<br>仲間を求めて動き始めるA子   | III期 | 友だちさがしの活動期<br>(No)  | No.37～No.48 | 新しい学校へ転校するA子                 |              |              |                  |              |
|                      |      |                     |             |                              | A子のつけたタイトル   | Sのつけたタイトル    |                  |              |
|                      |      |                     |             | 1                            | X年5月28日(42)  | 作品①図         | 「題して旅の始まり」       | 《別れを告げる少女》   |
|                      |      |                     |             | 2                            | X年6月4日(43)   | 作品②図         | 「題して旅のつづき」       | 《はじめに会った人》   |
|                      | 3    | X年7月9日(47)          | 作品③図        | 記入忘れ《題して友だちができた》<br>《ふんばる少女》 |              |              |                  |              |
|                      | IV期  | 自分さがしの活動期           | No.49～No.64 | 実際に旅に出かけるA子                  |              |              |                  |              |
|                      |      |                     |             | 4                            | X年10月1日(54)  | 作品④図         | 「題して西表島のペンションより」 | 《理想郷をみつけた少女》 |
|                      |      |                     |             | 5                            | X年10月8日(55)  | 作品⑤図         | 「題してはたらきものまち」    | 《行き止まりの地》    |
|                      |      |                     |             | 6                            | X年10月15日(56) | 作品⑥図         | 「題してみんなで家出をしよう」  | 《竜宮城》        |
|                      |      |                     |             | 7                            | X年10月22日(57) | 作品⑦図         | 「題して海底の海底」       | 《危険な旅》       |
| 8                    |      |                     |             | X年11月26日(60)                 | 作品⑧図         | 「題して銚子電鉄701」 | 《はじきとばされた地球》     |              |
| 3<br>新しい歩みを<br>始めるA子 | V期   | 確認期                 | No.65～No.68 | 面接のまとめをするA子                  |              |              |                  |              |
|                      | 9    | Y年3月17日(67)         | 作品⑨図        | 「題して車を見る猫」                   | 《戻ってきた少女》    |              |                  |              |

## 注

- 注1. インテーク時にバウムテストを実施した後にA子はⅠ期14枚、Ⅱ期7枚の木の絵を描いた。木の絵を描くと少しずつ新しいことに挑戦できた。
- 注2. SがつけたA子の箱庭作品のタイトル。
- 注3. A子は胃の痛む様子をしばしば「胃がシクシクする」という表現でSに伝えた。
- 注4. A子は短大生に見える程大人びた真紅や黒の洋服を着ていたが、同年代の仲間ができると中学生の服装になった。絵画に大きな花が登場した時、A子の赤いドレスを着ることで外出する自分を支えている姿と共通のテーマが出現しているとSは受取った。

## 文 献

- 石川 元 1986「描画テストの読み方」『臨床描画研究Ⅰ』家族画研究会編、金剛出版、9—11。
- 皆藤 章 1994『風景構成法—その基礎と実践』誠信書房
- 河合隼雄 1984「風景構成法について」『H.NAKAI風景構成法』山中康裕編、中井久夫著作集別巻、岩崎学術出版社、245—259。
- 上林靖子 1989「精神科医療からみた登校拒否」『教育』国土社  
514 (1989.11)、30—39。
- 町沢静夫 1993「不登校の類型」『精神療法』、金剛出版、19・6、510—517。
- 中井久夫 1984a「描画をとおしてみた精神障害者」『分裂病』中井久夫著作集  
1巻、岩崎学術出版社、47—77。
- 1994b「風景構成法と私」『H.NAKAI

風景構成法』山中康裕編、中井久夫著作集別巻、岩崎学術出版社、261—271。

1985c「風景構成法」(1973、箱庭講習会)『治療』中井久夫著作集2巻、岩崎学術出版社、226—231。

山中康裕 1984「〈風景構成法〉事始め」『H.NAKAI風景構成法』山中康裕編、中井久夫著作集別巻、岩崎学術出版社、1—36。